京に向かふ路の上にして、興に依りて予め作る侍宴応詔の歌一首　并せて短歌

四二五四番

あきづ島　大和の国を　天雲に　磐舟浮かべ　艫に舳に　ま櫂しじ貫き　い漕ぎつつ　国見しせして　天降りまし　払ひ平げ　千代重ね　いや継ぎ継ぎに　知らし来る　天の日継と　神ながら　我が大君の　天の下　治めたまへば　もののふの八十伴の緒を　撫でたまひ　整へたまひ　食す国も　四方の人をも　あぶさはず　恵みたまへば古ゆ　なかりし瑞　度まねく　申したまひぬ手抱きて　事なき御代と　天地　日月と共に万代に　記し継がむそ　やすみしし　我が大君秋の花　しが色々に　見したまひ　明らめたまひ酒みづき　栄ゆる今日の　あやに貴さ

反歌一首

四二五五番

秋の花　種々にあれど　色ごとに　見し明らむる今日の貴さ